



## 国際通用性のある質の高い教育 アカデミック・セントラル

### 東海国立大学機構が目指す教育 勇気をもってともに未来をつくる

デジタル革命やグローバル化が急速に進展し、社会が急激に変化する今日、世界は環境問題や人口問題などさまざまな社会課題に直面しています。また、産業構造も大規模かつ急速に変化することが予測され、岐阜大学と名古屋大学が位置するこの東海地域も、その変化に対応していく必要があります。

東海国立大学機構は、こうした社会課題に対して新たな価値を創造して対応できる人材を世界や地域に送り出していくことを目標とし、「勇気をもってともに未来をつくる」を教育の共通理念として掲げました。また、学生の皆さんが身につけるべき新たな価値を創造できる力を「考え抜く力」「進める力」「伝える力」と位置付け、これらの力を育成するための取組を進めていきます。

また、「ともに未来をつくる」には、従来の教員が学生に対して教えるという教育だけではなく、学問分野や国境、世代を超えて、学生だけではなく社会の多様な人々

が集い、皆で考えてともに成長していくという意味も込めています。

東海国立大学機構では、両大学の教育関係組織を連携させ、この理念に基づいた教育を創造し推進するための組織として2020年にアカデミック・セントラルを設置しました。

これまでに、遠隔講義システムを用いた岐阜大学・名古屋大学の共同開講科目「Studium Generale」、英語による夏季集中講義「Summer Camp」、数理・データ科学教育「実践データサイエンティスト育成プログラム」などを実施してきました。また、2021年度には、東海国立大学機構単位互換制度による学生受け入れへの試行として、名古屋大学全学教育科目において岐阜大学生の聴講受入を実施しました。2022年度には、サービラーニング<sup>※1</sup>、PBL<sup>※2</sup>等の両大学の特色を活かした講義において単位互換を本格実施する予定です。

※1 サービスラーニング:社会の要請に対応した社会貢献活動に学生が実際に参加することを通じて、体験的に学習するとともに、社会に対する責任感等を養う教育方法。

※2 PBL:課題解決型学習(Problem Based Learning)。身近に感じる具体的な事象から課題を学生が発見し、その課題を解決するために自ら学習させ、課題を解決させる教育方法。具体的な学習課題を立てて少人数グループでプロジェクトを進めるプロジェクト型学習(Project Based Learning)もPBLと呼ばれる。

#### アカデミック・セントラル

<https://www.thers.ac.jp/research/academic-central/index.html>



#### 東海国立大学機構 アカデミック・セントラル

#### 勇気をもってともに未来をつくる

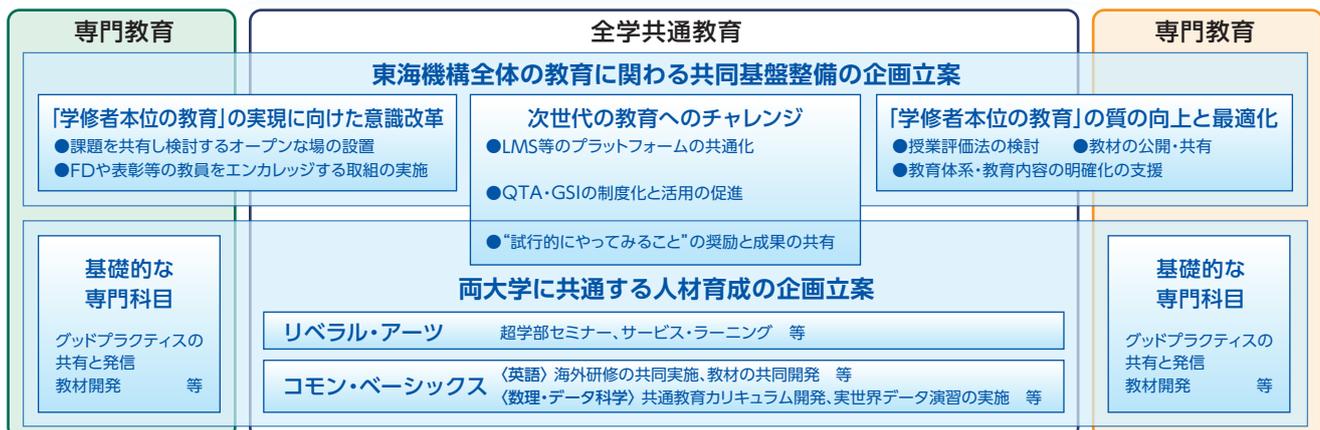
#### 名古屋大学

論理的思考力と想像力に富んだ  
「勇気ある知識人」の育成

考え抜く力  
進める力  
伝える力

#### 岐阜大学

「学び、究め、貢献する」人材の育成





## 航空宇宙生産技術開発センター 東海クライマックスシリーズ

航空宇宙生産技術開発センターは、国内でも数少ない「生産技術」に焦点を当てた教育研究機関として、内閣府「地方大学・地域産業創生交付金」並びに岐阜県「航空宇宙産業生産技術人材育成・研究開発事業費補助金」の支援を受け、2019年4月に岐阜大学に設置され、活動を開始しました。

本センターでの教育での取組について一部をご紹介します。

2020年4月、岐阜大学と名古屋大学の県境を越えた全国初の国立大学法人統合により、国立大学法人東海国立大学機構が発足し、2021年4月より両大学・産業界の協力体制の下で即戦力として育成する航空宇宙設計・生産融合人材育成プログラムを実施しています。その授業の一環から「東海クライマックスシリーズ」は生まれました。

東海クライマックスシリーズの記念すべき第1回大会は2021年の9月に開催されました。岐阜大学では工学部所属の4年生、名古屋大学では工学部所属の3年生を対象とした授業の中で、数名の学生でチームを編成し、協力して飛行ロボットの構想・設計およびその製作を行っています。東海クライマックスシリーズは、両大学の学生が製作した飛行ロボットを用い、各大学で事前に飛行競技会を実施し、その中から選抜された優秀機を一堂に会して、どの機体がどこまで飛行できるかを競う形で行われました。

各チーム2回ずつの飛行を行い、競技後大反省会・意見交換会を行うなどして両大学の交友を深めました。

この大会に参加した学生からは、「通常の授業や実験とは違い、マニュアルなどもなく実験結果も未知数という初めての経験でした。ゼロからの挑戦で本当に最初はわからないことだらけでとても苦戦しました。私は制御プログラムの担当で、設計担当者の飛行機に対する熱量を無駄にたくない一心でプログラムの改良に取り組みました。その結果、優勝という結果を勝ち取れたのだと思うと、このチームだったからこそ頑張れた成果なのだなと感じています。」(工学部 機械工学科(大会当時) 天藤 翔保さん 写真(上)一番左)などと、苦労したけれども達成感を得られたとの声が聞かれました。



このような大会を2022年も開催するために“クラウドファンディング”を実施し、数多くの皆様からご支援をいただき無事に開催できる運びとなりました。

2022年は9月22日(木)にOKBぎふ清流アリーナにて開催。詳しくは当センターHPをご覧ください。

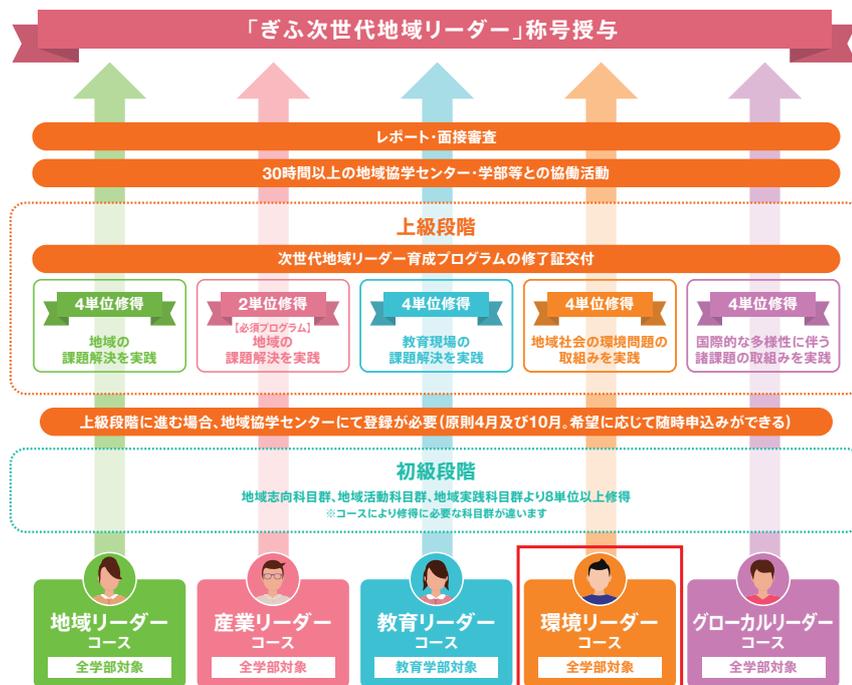
▶ 航空宇宙生産技術開発センター <https://www1.gifu-u.ac.jp/~ipteca/>





## 次世代地域リーダー育成プログラム 環境リーダーコース

### 次世代地域リーダー育成プログラムの履修プロセス



岐阜大学地域協学センターが進める次世代地域リーダー育成プログラムに2021年度より「環境リーダーコース」が新設されました。

次世代地域リーダー育成プログラムとは、「地域(岐阜)を知り」「地域(岐阜)の課題を見つけ」「地域(岐阜)の課題解決に向けて行動する」ことができる人材の育成を目指す岐阜大学全体で展開する教育プログラムです。

環境リーダーコースは、岐阜の自然や環境学などを学ぶほか、企業や自治体と連携して地域社会における環境問題に対する取組を実践します。

さまざまな分野からみた環境問題を学ぶことを通して、次世代地域リーダーに必要な素養や能力を養うとともに、将来においても、自ら主体的に環境問題に取り組むことのできる人材を育成します。

### 環境リーダーコースにおいて選択必修科目となっている2科目を紹介します



#### 社会とエコロジーの接点 ～キャンパスを利用した授業～

講義では、農林漁業をはじめさまざまな人間活動が自然と調和し持続的に成立している「社会生態システム」のあり方を、世界農業遺産「清流長良川の鮎」やグリーンインフラとしての柳戸キャンパスを題材に体験活動を中心に学びます。長良川上流から中流域にかけ「人々と川のつながり」を実感できる場を見学するほか、キャンパス内での堆肥作り、自然を活用したキャンパスの課題解決に関するグループワークなどを通し、身近な自然の活用が社会課題解決につながる可能性について理解を深めるカリキュラムとなっています。



剪定した樹木や落ち葉を使った堆肥作りで資源循環を体験



グループワーク(キャンパス空間の課題と可能性を発見する)

## 環境マネジメントと環境経営

講義では、地球が抱えている環境問題の現状や環境マネジメントの枠組み、環境負荷の分析評価から効果的な環境経営の手法を学びます。市役所や県、企業の方をゲストスピーカーとしてお招きし、自治体や企業が取り組んでいる環境対策及びSDGsへの取組について講義いただいています。

また2022年度からは、岐阜市でプラスチック製容器包装の分別収集が始まったことに伴い新設された岐阜市リサイクルセンターの施設見学を行い、再資源化の流れを学んでいます。



岐阜市リサイクルセンター見学

### 学生の感想

- ・普段みることができない自分たちが出したごみの行く先についてみることができ、とても良い経験となった。
- ・汚れた容器の選別やペットボトルキャップの取り外しを手作業で行っている作業を目の当たりにして、分別をより一層自治体の指定通り完璧にしていこうと思った。

## 新入生対象の初年次セミナーにて環境講義を実施

環境マインドを持つ人材育成を実現するため、新入生を対象とした初年次セミナーにおいて、環境配慮について学修する機会を設けることとし、2021年度より環境講義を実施しています。講義では、環境問題を理解し、企業や大学に求められる社会的責任の知識を身につけるため、本学の環境への取組、ISO14001認証、内部環境監査手法について説明し、地球規模の「気候変動」をもたらす、自然環境や人の暮らしに大きな被害をもたらすと考えられている地球温暖化の仕組みについて解説しています。



### 受講生の感想

数少ないISO14001を認証取得している大学に入ったので、積極的に環境を守るために取り組んでいきたいです。大学の二酸化炭素排出量削減目標を他人事だと思わず、意識して生活していこうと思います。



## 岐阜大学サテライトキャンパス 市民講座アカデミッククラブ 「SDGsと環境問題 ～持続可能な社会に向けて～」を開講



アカデミッククラブは、岐阜大学名誉教授等を講師とし、在職中の研究成果はもちろんのこと、退職後のライフワークとしての見識も話題とした市民向け講座です。

2021年度より長谷川典彦名誉教授による講座「SDGsと環境問題～持続可能な社会に向けて～」が開講され、参加者は5回にわたる講義で地球温暖化の現状と緩和策や適応策、SDGsの概要と取組などを学んでいます。



# 名古屋大学大学院 6研究科 ESDプログラム

名古屋大学 環境学研究科附属持続的共発展教育研究センター

教授 <sup>たかの</sup> <sup>まさお</sup> 高野 雅夫

名古屋大学大学院6研究科ESD (Education for Sustainable Development)プログラムは、持続可能な開発Sustainable Development (SD) の教育・研究に係る名古屋大学大学院の6研究科(環境学・国際開発・生命農学・工学・経済学・人文学)が連携して、SDに関わる授業を体系的に提供するもので、2013年度から実施しています。

2014年には、国連「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」(2005年～2014年)の「ESDユネスコ世界会議」が名古屋市で開催されました。2015年には国連が、2030年に向けたSustainable Development Goals (SDGs) を採択しました。名古屋大学もSDGs達成に向けて貢献することを内外に表明しており、特にそのための人材育成を担うことがその役割と言えます。SDのリーダーとなることが期待されている名古屋大学の大学院生にとっては、リベラルアーツとしてSDの価値・知識などの基本理解・共有化が不可欠です。さらに幅広い分野の知識を得る必要があります。名古屋大学のそれぞれの研究科はすでにSDに関わる授業を多く開講していま

す。それらを全体で見れば非常に幅広い分野をカバーしています。そこで他研究科のSDに関わる授業をリスト化し、価値、原則、知識、相互依存性、制度的イノベーション、地域知・伝統知・土着知、技術的イノベーションのカテゴリーに分類しました。このリストを6研究科の博士前期課程新入生全員に紹介する取り組みをしています。学生たちは、SDの価値や基礎的知識を理解したり、具体的に解決策を見出すためのスキルや技能を習得するなど、自分の興味関心や理解の段階に応じて授業を選ぶことができます。

このプログラムでは他研究科の授業を受講できるところに特に意義があります。他研究科の履修科目も単位認定されます。2021年度は全体で延べ1,153名の履修者があり、このうち、延べ74名が他研究科の科目を履修しました。このプログラムによって、SDの価値と知識を共有し、また、Solutionを見つけ出す手腕と技能を習得し、複数のSDGsを同時に目指すことができる人材が生まれることを期待しています。



解決策を見出すための授業の例  
持続可能な地域づくり実践セミナーでのフィールドワーク風景

本プログラムの受講者数の推移

	履修者延べ人数	他研究科履修延べ人数
2013年度	1,028	81
2014年度	986	85
2015年度	944	82
2016年度	1,080	115
2017年度	982	95
2018年度	1,150	91
2019年度	1,201	98
2020年度	1,110	78
2021年度	1,053	74



# 名古屋大学国際環境人材育成プログラム(NUGELP)



名古屋大学 環境学研究科

准教授 いりょう みほ 井料 美帆

## 1. プログラムの概要

名古屋大学国際環境人材育成プログラム (Nagoya University Global Environmental Leaders Program, 以下NUGELP(ニューゲルプ)) は、環境問題や持続可能な開発に国際的・実践的に取り組むリーダーを育成する、全て英語の大学院教育プログラムです。アジア・アフリカを中心とする留学生と日本人学生が共に学んでおり、環境学研究科都市環境学専攻持続発展学コースと、工学研究科土木工学専攻の学生が参加しています。

## 2. 参加学生

NUGELPでは2009年の開設以来、これまでに290名以上の学生が参加してきました。留学生と日本人学生の割合がおおよそ2:1で、留学生の国籍は累計30カ国を超え、極めて多様です(図1)。現在も、フィリピン、ブータン、インドネシア、南アフリカなどから学生が来ています。留学生の多くは国際協力機構(JICA)の支援で来日している現地の国家公務員です。実務経験もある彼らは、母国で直面する課題に取り組もうと学習意欲も高く、日本の学生にもよい刺激になっています。

## 3. 特徴的な授業・活動

学生は皆、工学系の大学院生として、防災、インフラの開発・維持管理、交通まちづくり、プラスチックのリサイクル技術など、個々人の専門分野の研究を行っています。これに加えてNUGELPの講義を履修することで、国際環

境人材として他の分野の専門家と連携し、より広範な視点から課題解決ができる能力を養えると考えています。

具体的には、グループ討論の形式で環境問題への論理的説明力を鍛える講義、産業界や国連地域開発センターなどから講師を招いて途上国開発やSDGsへの取組の実態を聞く講義があります。さらに「グローバル研究インターンシップ」では、日本人は海外、留学生は国内で、自分の専門分野に関連する企業や研究機関に2週間以上滞在し、実践的な能力を身に付けます。

2021年は新型コロナウイルスの影響により、国際的な行き来に制約があったため、オンラインでスタディツアーを実施しました。ドイツの現地在住ガイドに各都市から現地中継してもらい、持続可能なまちづくりを学びました(図2)。また、持続可能で強靱な交通・都市に関する国際会議Aichi2021に参加し、水素ステーションや自動運転バスなどの視察・体験を行いました(図3)。

NUGELPを運営する国際環境人材育成センターは、2022年度から名古屋大学グローバル・マルチキャンパス推進機構の傘下に入りました。今後は、大学の各種国際プログラムとも連携しながら進めていきたいと考えています。

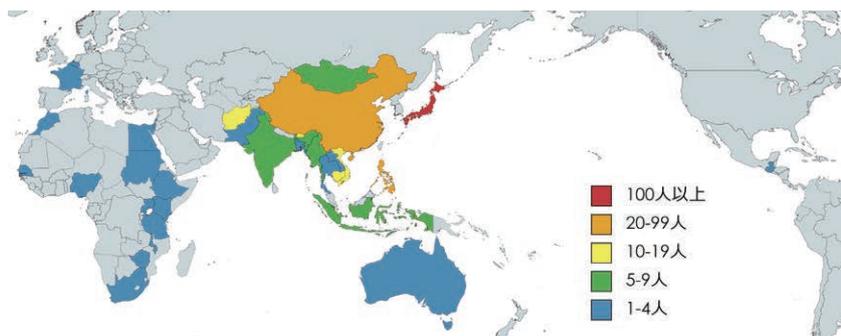


図1 これまでのNUGELP参加者の国籍別分布

▶ 名古屋大学国際環境人材育成プログラム NUGELP  
<https://www.civil.nagoya-u.ac.jp/nugelp/top-ja/>



図2 ドイツ・オンラインスタディツアー (2021.8.23)



図3 持続可能で強靱な交通・都市に関する国際会議Aichi2021にて自動運転バスの試乗体験(2021.10.20)



## 和牛繁殖農家

おかやま なおと  
岡山 直人氏

2014年度 岐阜大学 応用生物科学部 生産環境科学課程 卒業

## 現在の業務について

私は、2022年4月から肉用牛経営で新規就農しました。牛肉を生産する肉用牛経営には大きく分けて、子牛を育成し出荷する繁殖経営、その子牛を更に育成して肉として出荷する肥育経営、繁殖と肥育を一貫しておこなう一貫経営があります。私がおこなっているのは繁殖経営で、黒毛和種の牛を飼養しています。



飼養している黒毛和種の雌牛

2020年4月より2年間、岐阜大学応用生物科学部附属岐阜フィールド科学教育研究センター美濃加茂農場内に設置された飛騨牛繁殖研修センターの研修生として飼養管理技術等を学ばせていただき、関係機関の方々のご支援の下、就農することができました。

## 学生時代の学業・研究・その他活動に関する思い出

学生時代は、動物栄養学研究室で主に反芻動物の栄養について学びました。研究室では当時ヤギやヒツジを約30頭飼養しており、所属学生で毎日の給餌や清掃をはじめ、削蹄や体重測定等の飼養管理をおこなっていました。

日常的に動物と向き合うことで、責任感ややりがいを感じる経験ができ、今の自分につながっているように感じています。

また、講義や実習でも飼養管理の実践や見学、行動観察や解剖といった形で大学の農場や動物園、水

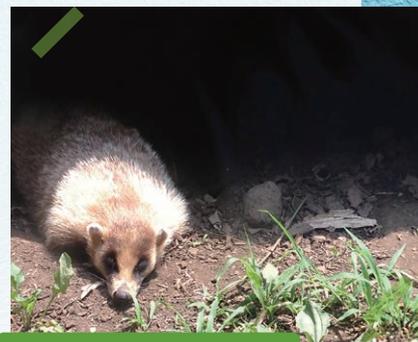


族館等の動物に関わる機会も多く、動物と向き合う上で重要となる観察力と考察力を養うことができたように思います。

## 在学生へのメッセージ

私の場合、単純に動物が好きという理由で入学し、動物を中心に環境や社会等について学び、入学当時には考えたこともなかった分野の卒業研究をし、結果的には思いもよらない職に就いています。なんとなく興味があるものを深めていくことで、自分自身でも想像していなかったような自分に出会えるかもしれません。

近年、畜産においてアニマルウェルフェアが注目されています。現在の日本ではあまり認知が進んでいませんが、認証制度における基準に規定される等、今後、その重要性が大きくなる考え方です。畜産に携わる者として、飼養環境を適切に整えることで、疾病の防止や社会行動の発現等、動物の状態を良好にするように努め、より消費者の方々が



実習で訪れた動物園で飼育されていたニホンアナグマ

満足して食べる事ができるような肉の生産に繋げていくことができればと思います。



生まれて間もない子牛

研究室で飼養していたヒツジ

中部電力株式会社

井ノ尾 徳哉氏

2016年度 名古屋大学 法学部 法律・政治学科 卒業

### 大学に入学し「社会課題の解決」に興味をもったきっかけ

私は父親が社会の高校教員だったこともあり、時事問題や政治経済に触れる機会も多く、本格的に法律や政治を学びたいと名古屋大学法学部法律・政治学科に2013年に入学しました。

その中で法学部の主催するインターンシップで大学2年生の時、国会議員事務所にて自民党部会を見学させていただいた際、増田寛也氏が地方消滅に関する書籍を発行された直後だったこともあり、急激に人口減少が進む中で政策横断的に危機感をもって検討がなされている状況に衝撃を受けました。そして、この地方創生の分野をライフワークとする中で日本社会全体の生産性を維持・向上していきたいとの思いに至りました。

### ユニバーサルサービスとしての健康と福祉の推進



イベント体験会でのPR風景

前述の問題意識から、公益的使命を担う中部電力に入社し、3年目以降は事業創造本部で新規事業立ち上げを担い、主に注力している地域包括ケア分野以外にも幅広くプロジェクトに関わる中で経験を積んできました。

現在は愛知県豊田市の官民連携介護予防事業「ずっと元気!プロジェクト」に携わっています。このプロジェクトは運動や就労をはじめ社会参加といった介護予防サービスの提供を通じて健康寿命を延伸しようという取組です。今後、団塊の世代が大量に75歳を迎えることに加えて、コロナ禍も相まって、高齢者の活動量の



低下、ひいては、医療・介護費の増加に一層拍車がかかることが水面下では大きな社会課題になっています。つまり、要介護状態が進行するリスクが急速に高まっているので、そのリスクを低減すべく2021年7月より本取組は開始されたものになります。

### 学生時代の学びとの接合

過去に例のない規模であり、全国的にみても先駆的な本プロジェクトでは、誰のどのような課題にフォーカスするのか、またビジネスモデルとして回るのかを、常に仮説を立てながら推進しております。

この点、学生時代に所属していた政治学のゼミでは、福祉国家や安全保障といった現在取り扱っている 이슈とは異なるものの、解答の無い問い、そして、そもそも何が有意義な問いなのかを探り、分析的に考える機会が多く、現在の事業の創造に際しても大いに役立っております。

また、新たな事業の創造に向けては、業界の枠を超えた構想作りが不可欠であるとともに、その実現に向けた仲間づくりをしながら連携していくチームビルディング力も重要であるところ、大学時代に同窓の仲間と侃々諤々の議論をしながらコラボレーションし、アイデアを生み出してきたことも今振り返れば大きな学びであったと感じています。

日々試行錯誤ではありますが、仮説レベルであった事業アイデアが少しずつお客さまに認知され、社会実装されていくことで達成感が湧いてくるとともに、社会のトップリーダーとして活躍できるように腕を磨きながら、社会課題の解決に向けた取組を加速化していきたいと思っています。



事業紹介パンフレット

## 株式会社エドギフト 代表取締役

## 村松 美穂氏

2019年度 名古屋大学 工学部 物理工学科 卒業

2021年度 名古屋大学 工学研究科 材料デザイン工学専攻博士前期課程 修了



創る人を育む  
木製組み立ておもちゃ  
テグミー

## 学生時代に起業したきっかけ

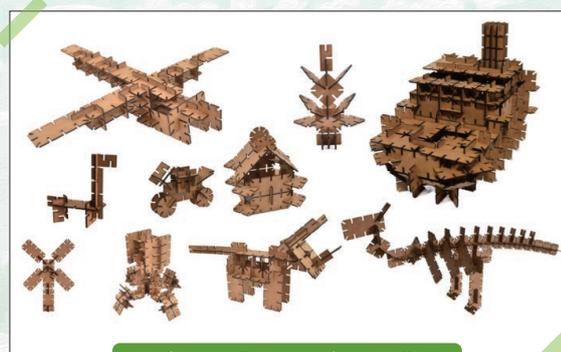
とことんものづくりがしたい、そんな想いで選んだ工学部。学部時代はロケットサークルに所属してロケット開発に没頭し、4年次からは鉄に関する研究室に所属していました。

また同時に、新しいものを創る楽しさをたくさんの人に届けたいと思い修士2年の時に株式会社エドギフトという教育系の会社を立ち上げました。エドギフトでは、「幼少期からあたらしいモノを産み出す楽しさに触れて欲しい」という想いで子供向けの組み立ておもちゃTEGUMII(テグミー)の開発販売を行っています。

## 創る人を育む木製組立おもちゃテグミー

テグミーとは、パーツのスリット同士を挿し込んで遊ぶ木製の組み立ておもちゃで、平面パーツから立体的な作品をダイナミックに創造することができます。

私たちが現在さまざまなことに挑戦する糧となっているのは「失敗を繰り返しながらも、試行錯誤を繰り返す、新しいことに触れて考え抜くことで新たな発想につながる」という想いです。正解がなく自由な発想で楽しめるテグミーに触れることでそんなメッセージを伝えられたらと考えております。



テグミーで作ることができる作品

テグミーは材料として木材繊維板(MDF)というものを使用しています。MDFとは、間伐材や端材等の木材を繊維状にほぐしてボードに成形したものです。テグミーの材料として使用しているMDFは東京都港区の「みなとモデル二酸化炭素固定<sup>(\*)</sup>認証制度」への登録、木づかい運動、間伐材マーク、FIPC木材表示制度などの認証を取得しています。

## ※二酸化炭素固定化

二酸化炭素固定化とは、大気や排気ガスに含まれている二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を何らかの形で固定することを指します。CO<sub>2</sub>を固定することで大気中のCO<sub>2</sub>排出量を減らすことができます。



テグミーの材料に使用している木材

## クラウドファンディングに挑戦

エドギフトはこのテグミーで2022年1月15日から2月28日まで、CAMPFIREにてクラウドファンディングに挑戦しました。その結果、なんと1時間で目標金額を達成、中部経済新聞やNHK東海のニュースでも取り上げていただき、最終的には200万円以上をご支援いただきました。支援者からは「木製だから、子どもだけではなく大人や高齢者でも楽しめそう」「木の香りがして癒されます」といった声をいただいています。

エドギフトは今後とも、創る人を育むための事業をさらに発展させるとともに、環境への配慮も推進して参ります。

▶ 株式会社エドギフト  
<https://edgift.co.jp/>

▶ TEGUMII(テグミー)/オンラインストア  
<https://tegumii.com/>



## 銘建工業株式会社

## 井上 郁人氏

2018年度 名古屋大学 農学部 生物環境科学科 卒業



## 環境を意識したきっかけ

高校生の頃、山や田畑が身近にあり「これだけ自然資源があふれているのに、環境問題という言葉がある。今後長い将来で自分にできることは？」と感じたことが、私が環境を意識したきっかけです。

## 名古屋大学での研究・課外活動

自然資源の中でも、特に木に興味を持ち、農学部生物環境科学科で3年間、広く森林科学について学びました。4年次では木材工学研究室で「中層木造建築における木質材料<sup>\*1</sup>の生産システム評価」というテーマで卒業研究にあたりました。

課外活動では、木材利用促進を理念に置いたサークル「MOKKO」の立ち上げメンバーとして活動しました。MOKKOとは私が4年進級時(2018年春)に、複数大学の学生にて設立されたインカレサークルで、学生コンペの主催/参加、木製ベンチの設計/施工、小学校やイベントでの木材に関する情報発信など、多方面で活動を行いました。

## 現在の仕事の紹介

銘建工業株式会社は、構造用集成材やCLTなどの木質材料の製造が主な事業内容です。そのほかには、中大規模木造建築の設計提案/施工を担う木質構造事業や、製造時に発生する木片を活用したバイオマス事業にも取り組んでいます。

所属する技術開発部の業務は多岐にわたり、主に自社製品を拡販するため、自社発のテーマや他社様との共同開発などにあたります。

その中でも、現在、恩師である山崎真理子先生や三重大学の先生と一緒に委託研究事業に取り組んでいます。内容は、建物および建設活動におけるSDGs貢献度評価法の新提案で、お客様のニーズの可視化とメーカーとしての取組の改善などを目的に、調査/開発にあたっています。

## 学生時経験と現在の仕事に通ずる点

在学中には、気候変動への有効な対策として、HWP(伐採木材製品)の炭素貯蔵効果<sup>\*2</sup>が世界的に期待されていると学びましたが、入社後改めて、多くのお客様がこの観点から木質材料の採用を検討して下さっていると肌で感じられました。

## 業務として環境について抱く目標

木材の環境貢献への期待度は高い一方で、同時にこれらに応えるために供給体制の強化が必要と考えます。例えば、原材料調達時には、森林経営に関する持続可能性の証明や、人道的観点からのリスク評価も、今後益々求められるでしょう。

加えて、企業としても、抽象的な表現ではなく、具体的な情報発信が必要であると感じています。これからもより一層、自社の環境貢献について自信をもってお伝えできるよう業務に励んでまいります。

※1 木材や木片を原材料に接着剤などで再構成した材料。

※2 森林が成長過程で、大気中の二酸化炭素を吸収し、伐採/搬出されたあとも木材の成分として炭素を貯蓄しているという考え方。

▶ MOKKO  
<https://mokko-timberstudentcouncil.jimdofree.com/>

木質材料製品  
(構造用集成材)バイオマス事業による  
ペレット製品銘建工業新社屋の  
木躯体工事の様子